

2年 生活科学習指導案

授業者 住田 亮

1. 単元名 「みんなの野菜が給食に？元気に育て しあわせ野菜」（動植物の飼育・栽培）

2. 単元の目標

○自分で選んだ野菜の世話をする活動を通して、野菜に合った世話の仕方があることに気付くことができる。 [知識及び技能の基礎]

○自分の野菜を観察する活動を通して、野菜の変化や成長の仕方から、元気に育てるための世話の仕方を考えることができる。

[思考力、判断力、表現力などの基礎]

○これまでの野菜の世話を振り返る活動を通して、自分の野菜に親しみをもち、これからも植物を大切にしようとする。

[学びに向かう力・人間性等]

3. 子どもと教材

(1) 子どもについて

本学級の子どもはこれまでの生活科で、自分や友達の思いの実現に向けてよりよい方法を見出そうとしてきた。5月に行った「マジカルスティックをつなげて」の実践では、スティックを繋げてできる空間遊びを楽しんだ。子どもは自分の作りたい空間に向けて活動していく中で、進んで友達と関わることを選択していた。1人当たりのスティックの数が決まっていたため「何作っているの？家？私も一緒に作りたい！」と、自分と友達のやりたいことが一致し、協同する子もいれば「一緒にやろう！何作る？僕は船か迷路がいいな。じゃあ船にしよう」と、グループを作った後で何を作るのかを合意形成する子もいた。このように友達と活動する中で、子ども一人ひとりが自分のやりたいことを明確にもち、活動の中で友達と話し合う姿が多く見られた。その中で自分のやりたいことを説明して友達に協力してもらおうとしたり、友達のやりたいことのよさに気付き自ら協力的に動いたりするなど、互いに影響し合っていた。自分のやりたいことを明確にもち、その実現に向けて友達と関わる中で、自分や他者にとってよりよい方法を見出そうとしていた。

普段の学校生活では、自ら教室を掃除する姿や、休みの子の係の仕事や給食当番を進んで行う子どもが多い。担任がその理由を聞くと「教室がきれいだとみんなも自分も気持ちいいから」「代わりにやればみんなのためになるから」と話していた。このことから、本学級の子どもは、他者のために行動することの喜びを知っているだけでなく、そのために行動することのよさも感じているととらえている。また、カタツムリやダンゴムシなどの生き物に熱中している子どももいる。カタツムリやダンゴムシを飼育する中で、虫籠の中を生き物がこれまで暮らしていた環境に寄せるために霧吹きをしたり落ち葉を入れたりするなど生き物を上手に飼育しようとする姿が見られる。また、ダンゴムシから赤ちゃんが生まれた際には「大きくなるのが楽しみ」と生まれたことへの喜びを感じると同時に「このままの飼い方で大丈夫かな」と不安も表出していた。これらの子どもの姿から生命を大切にしようとする素地が育まれてきていることがうかがえる。

本単元では、野菜の栽培を行う。子どもは自分の育てた野菜が給食に使われることで「食べてもらえるようにしっかり育てなきゃ」と栽培することへの思いをより強くしていくだろう。また、野菜を育てる中で自分の野菜に対して愛着をもち、野菜への思いをより強くすることも考えられる。そうして野菜やその栽培に対する思いを強くもった子どもは本単元を通して、野菜を育てたことや給食でその野菜をみんなに食べてもらえたことなどから喜びや達成感、満足感を得るはずだ。その過程で、野菜に対する気付きを得ていくことが、今後の生活をより豊かにしていくと願ってやまない。

(2) 教材について

本単元では「野菜」を材とし、1人1つの植木鉢で野菜の栽培を行う。集団で同じ鉢やプランターを

使うのではなく、1人1つの鉢を使って育てることで「自分だけの野菜」といった意識が生まれやすいはずだ。子どもが自分の野菜に愛着をもち、自分のやりたい世話にとことん向かうことも可能になるだろう。本単元で扱う野菜はミニトマト、ナス、ピーマン、キュウリとし、子どもはこの4種類の中から自分の育てる野菜を選ぶ。野菜の種類が限られていることで自分の周りに同じ野菜を育てる友達がいる状況が生まれる。子ども一人ひとりが自分のやりたい方法で野菜の世話に向う環境が保障されつつも、友達の野菜の様子や世話の仕方を見て、真似したり友達に聞いたりする等、必要に応じて友達と関わるができる環境は子どもにとって魅力であると考ええる。加えて、育てた後にその野菜を食べることができることも魅力であるといえるだろう。野菜を育て、収穫するだけでなく、その育てた野菜を自分や全校のみんなで食べることでより達成感や満足感を得られるだろう。また「おいしかった」「残さず食べたよ」と野菜を食べた人から感想をもらうことは、他者に自分の頑張りを褒められる・感謝されるといった経験となり、その子の自己肯定感を高めることにもなり得るだろう。子どもが本単元を通して、自分のやりたいことに向かって突き進んでいく中で、自分の思いの実現に向け活動する楽しさを感じることや、自分の頑張りを褒められたり感謝されたりする経験が、子どもの今後の生活をより豊かにしていくことを願っている。

4. 本単元における『その子らしく学ぶ』

本学級の子どもは、今年度の生活科の学習が始まった時から「先生！野菜っていつ育てるの？」「どんな野菜を育てるの？」など昨年度の2年生と同じように野菜を育てることを期待し、心待ちにしている。また日常的に子どもからは、他者を慮った言動が多く見られる。係決めでは「みんなのしあわせのためにはみんながあるといいと思う仕事にしくちゃ」といった発言や、1年生の交流会の計画では「1年生がしあわせになるために1年生が楽しめる遊びを選ぼうよ」といった発言があった。休み時間には「教室がきれいだとみんながしあわせだから」と自ら教室を掃除する姿も見られる。そのような子どもは野菜を育てる中でも「大きく育てたい」「実がたくさんできるようにしたい」という「もっと〇〇したい」という自分の思いをもち、その思いの実現に向けて試行錯誤していくだろう。ある子は、野菜の資料を見て、野菜がよく育つためには日光に当たることが必要ということを知り、鉢を置く場所を変えながら、自分の野菜にとって一番適した場所を探すだろう。また、ある子は「自分たちの野菜が給食で使われることを全校のみんなに知ってもらいたい」という思いをもち、これまでの頑張りと、野菜のおいしさがどうすればよりうまく伝わるだろうと発信方法を吟味するだろう。また、思いの実現に向けて野菜の世話の仕方や全校への発信の仕方へとやりたいことがより焦点化されていくだろう。育てた野菜を自分だけでなく他者にも食べてもらうことによって、やりたいことへの思いを膨らめながら、野菜を育てる中で『その子らしく学ぶ』姿を表出していくはずだ。

第①時に、野菜の学習をどのように進めていくかを話し合う。子どもからは「育ててみたい」「野菜がどのように育つかを調べてみたい」「食べたい」などのやりたいことが出よう。「育てた後に食べたい」という思いが高まったタイミングで調理員からの「野菜を育てるならその野菜を給食に使ってみない？」という提案を子どもに伝える。「本当に使ってもいいの？」「やってみたい」と給食の一部を自分たちが担えることへの期待感や喜びを高めるはずだ。一方で「自分たちが育てた野菜で足りるのか」「どんな種類の野菜を育てればいいのか」と給食に使ってもらうことに向かっていく上で解消したい不安なども表出するだろう。

第②時では、第①時に挙げた不安を解消するために調理員に質問する。提案してくれた調理員本人に直接質問することで、不安を解消するだけでなく「育てた野菜を給食に使ってもらいたい」という気持ちをより強くしていくだろう。

第③時では、育てる野菜を選ぶ。子どもはこれから育てることと収穫後に個人で食べたり給食で全校のみんなに食べてもらったりすることを踏まえ、調理員から提案された4種類の野菜の中から好きな野菜や育ててみたい野菜を選ぶだろう。

第④時では、野菜の苗と出会う。苗を手にした子どもは、これから育てる自分の野菜に期待を膨らめ

ていこう。中には「毎日水をあげるようにしよう」「鉢をどこに置こうかな」と1年生の時のアサガオや家庭で栽培した植物などの経験を基に世話の仕方を考える子どももいるだろう。

第⑤時では、野菜の生育状況や世話の方法を共有する。野菜の世話に課題を感じている子に対して野菜の世話に手応えを感じている子がアドバイスする状況が予想される。課題の中には、子どもがも合わせている知識や気付きでは解決が難しいものもあるはずだ。そのような課題に対して子どもは、野菜の育て方の資料や本から解決方法を探そうとしたり、親戚などの身近にいる野菜の栽培について詳しい人に話を聞こうとしたりするだろう。これまでに世話をしてきたことや、この先に収穫が待っていることから、課題の解決に向けて活動する姿を期待したい。

第⑥時では、自分たちの野菜が給食に使われることをどうやって周りの人に知ってもらおうのかを話し合う。子どもは「僕たちが育てた野菜だと知ってほしい」と発信することへの思いを表出するだろう。そして「去年の相棒さんが自分たちで献立を考えたときみたいに放送で伝えるのがいいんじゃない」「委員会みたいにポスターを作って他のクラスに持って行くのもいいんじゃない」など、他のクラスへの発信方法について個々の考えを出すだろう。「これまで大切に育ててきた野菜を他のクラスの子に美味しく味わってほしい」「自分たちの頑張りを知ってほしい」といった思いが根幹となって考えを出し合っていくはずだ。

第⑦時では、発信するための準備をする。呼びかけに使うポスターやチラシ作り、また放送に使う放送原稿作りなどが行われるだろう。これまでに野菜の世話をする中で、同じ野菜を育てる仲間と関わりをもった子どもは、その仲間と協同的に取り組むはずだ。また、自分の野菜や育て方にこだわりをもっている子どもは個人で取り組むだろう。

第⑧時では、自分たちの野菜が給食で出た感想の共有と単元の振り返りをする。子どもは「おいしく食べられてよかった」「本当に給食に出て嬉しかった」など達成感や満足感を表出するだろう。また「相棒がおいしかったと言ってくれてうれしい」「1年生がすごいと言ってくれた。またやってみたい」など、他のクラスからの感想によって達成感や満足感をより感じたり、次の学びへの意欲を高めたりする姿を表出するだろう。また、これまでの世話を振り返り「給食で使ってもらえるように毎日忘れずに水をあげたよ」「虫が葉っぱを食べちゃうから、何度も様子を見に行っただ」など、給食で使ってもらおうという目標に向け、頑張ってきたことを自身で価値付けることに期待したい。

5. 単元構想（全8時間扱い／本時は第⑥時）

＜教師の働きかけ＞

子どもの表れ

最終時における子どもの表れ

○教師の働きかけ

① ＜野菜の学習でどのようなことをしたい？＞

- ・育ててみたい！
- ・どうやって野菜ができるのかを見てみたい
- ・育ててその後に食べてみたい

＜実は調理員さんから「給食に使ってみませんか」と

話が来ているんだけど、どうする？＞

- ・給食に使ってもらいたい！みんなで食べたい！
- ・育てた野菜が給食に出るってすごいよね！
- ・できた野菜の半分を持って帰って、もう半分以上を給食に使ってもらえばいいんじゃない

- ・自分家に持って帰って食べたい
- ・僕たちが育てる野菜だけじゃ給食には足りないよ
- ・野菜が給食の日に丁度とれないといけないから難しいよ

調理員さんに聞いてみたい

○子どもが栽培後にしたいことへの思いを膨らめることができるように、調理員からの提案を子どもに知らせる。

○子どもが野菜を給食に使ってもらうことに対して見通しをもち栽培に向かえるように、不安を共有し、解消するための方法として調理員へ質問することを確認・整理する。

②＜調理員さんに聞いてみよう＞

調理員

- ・僕たちの育てた野菜で足りるかな？
- ・八百屋さんの野菜と混ぜたら、自分の野菜が分からなくなっちゃう
- ・献立と違う日に野菜が取れちゃったら給食には使ってもらえないの？
- ・どんなやさいだったら給食に使ってもらえるの？
- ・八百屋さんの野菜と合わせるから大丈夫だよ
- ・クラスで取れた野菜だけ切り方を変えてあげられるよ
- ・1週間くらいなら冷蔵庫に入れて置けるし、1週間くらい給食に育てた野菜を入れてあげられるよ
- ・よく使う、ミニトマトやキュウリ、ナス、ピーマンかな

- ・八百屋さんの野菜と合わせて足りるならやれるね！
- ・僕たちの野菜ってわかるように切り方を変えてもらえるなら、みんなに自分たちの野菜を味わってもらえそう
- ・その日だけじゃなくて1週間も育てた野菜を使ってもらえるんだね。それなら1週間のどこかで使ってもらえるね

③＜どの野菜を育てるのかを決めよう＞

- ・絶対ミニトマトがいい！私ミニトマトが一番好きだもん
- ・ナスにしようかな。あんまり好きじゃないけど、自分で育てたら好きになれるかもしれない
- ・ん〜、どうしよう。たくさん実ができていいんだけど

④＜野菜のお世話をはじめるよ＞

- ・やった！甘いトマトに育ってほしいな
- ・よーし！毎日水やりを頑張るぞ！
- ・どこに置こうかな。たくさんお日様の光が当たるところがいいんだよね

⑤＜野菜のお世話はうまくいっている？＞

- ・同じ野菜なのに私の野菜はあんまり大きくなってない
- ・水が少ないのかもしれないよ。多めにあげてみたらいいんじゃない
- ・僕はお日様の光にたくさん当たるようにしたら大きくなったよ
- ・育て方の紙に肥料をあげるといいって書いてあるよ
- ・実ができてきたけどいつ収穫すればいいんだろう
- ・大きくしたいからさ、すぐに取りたくない方がいいよ
- ・お店で売ってるくらいの大きさになったらでいいんじゃないの
- ・育て方の紙には15cmくらいって書いてあるよ

⑥＜もうすぐ給食で使ってもらうけど、どうやって知ってもらおう？＞

- ・去年の相棒さんが自分たちで献立を考えたときみたいに放送で伝えたいな
- ・委員会みたいにポスターを作って他のクラスに持って行くのもいいんじゃない
- ・教室だけでなく廊下とかにも貼ってわかるようにしようよ

＜みんなはどんなことを伝えたいの？＞

- ・野菜のお世話を頑張ったことを知ってほしいな
- ・大事に育ててきたことをわかってほしいな。残さず食べてほしいもん
- ・野菜の栄養とかも伝えたら、全部食べてくれるかもしれないよ。調理員さんもうれしいと思う

○子どもが安心して野菜の栽培に取り組めるように、調理員に質問する時間を十分確保する。また、子どもの不安が解消されるように、子どもから挙がっている不安を事前に調理員と共有しておく。

○子どもが判断しやすいように調理員に質問をして分かったことを整理し、給食で使ってもらうかを決める。

○子どもが野菜を自分で選べるように、悩んでいる際に野菜の資料を見ることができると伝える。

○子どもが昨年度育てたアサガオで得た気づきを野菜の栽培につなげられるよう、植木鉢に移す際に、水やりの仕方や鉢を置く場所などを共有する。

○子どもが感じている課題が解決できるように、子ども同士で解決案を出すほか、野菜の資料や野菜に詳しい人から解決方法を得ることも1つの方法であることを確認する。

○子どもがやりたい宣伝方法を選べるように、委員会や他の学年がどのような方法で宣伝しているのかを聞き、可能な宣伝方法が複数あることを共有する。

○伝える内容がより明確になるように「何について伝えたいのか」「どうして知ってほしいのか」を子どもに問いかける。

⑦<伝えるための準備をしよう>

- ・毎日忘れずに水をあげたこととか、肥料をあげたり虫を取ったりしたことを放送で言おうよ
- ・ポスターに今までの写真を載せるのはどう？大事に育ててきたことが分かるんじゃない
- ・調理員さんに献立のことを聞いてそれを伝えよう。苦手でも食べてみようと思ってくれそうじゃん

○子どもが見通しをもって活動できるように、使える材料や道具、作業時間を伝える。

⑧<これまでを振り返ろう。給食に使ってもらえてどうだった？>

- ・自分たちが育てた野菜だったからおいしく食べられたよ
- ・本当に給食に出てうれしかった
- ・相棒がおいしかったって言ってくれてうれしい
- ・1年生がすごいって言ってくれた

○子どもがより達成感を得られるように、給食を食べた感想を他のクラスから集め、子どもに提示する。

<野菜のお世話をやってみて、どんなことが思い出に残った？>

- ・給食で使ってもらえるように毎日忘れずに水をあげるのが大変だったけど、ちゃんと育てられてうれしいな
- ・虫が葉っぱを食べちゃうのも困ったよ。でもお世話を頑張ったから給食に使ってもらえた。頑張ってよかったな
- ・僕はナスがあんまり好きじゃなかったけど、自分で育てたから少し好きになれたよ
- ・他の野菜も育ててみたいな。家でもやってみたい

○子どもがこれまでの野菜の世話を自身で価値付けできるように、野菜の世話や給食に使ってもらうことに対して思いを膨らめたことや、世話をする中で頑張ったことや困ったことなど、これまでの過程を思い出せるように声掛けをする。